



Architectural Institute of Japan  
Shikoku Chapter

## 学生キャリア形成を目的とした合宿型ワークショップの試み 2025

—徳島県三好市ウマバ集落をフィールドに—



一般社団法人日本建築学会四国支部

男女共同参画推進委員会

Architectural Institute of Japan

Gender Equality Promotion Committee

協力：一般社団法人四国まんなか創造推進協議会

学生キャリア形成ワーキンググループ 四国建築学生支援研究会

学生キャリア形成を目的とした合宿型ワークショップの試み 2025  
—徳島県三好市ウマバ集落をフィールドに—

目 次

1.	はじめに	・・・1
2.	合宿型ワークショップの開催に向けた事前準備	・・・1
3.	建築学生フィールドワーク合宿 2025	・・・3
	（1） 実施概要	
	（2） 集合・ガイダンス	
	（3） まち歩き	
	（4） レクチャー	
	（5） 交流バーベキュー	
	（6） まちあるきまとめ	
	（7） 中間報告	
	（8） ヒアリング・フィールドワーク	
	（9） 成果公表会	
4.	作品紹介	・・・13
	1班「よせて集めて・・・」	
	2班「ウマバのファンを増やしたい！」	
	3班「残すことで、つなぐ。」	
	4班「このくらしをまもる。」	
	5班「ウマバフラワーロード」	
5.	参加者アンケートから見る成果と課題	・・・18
6.	おわりに	・・・23

## 1. はじめに

(一社)日本建築学会では、2015年に「建築学会女性会員の会」が創設され、各支部での活動が推奨されたことを受け、四国支部においても2017年5月13日(土)に女性会員の会シンポジウム「女性会員の会 今後の活動方針について」を開催した(登壇者:池添純子、内海彩、釜床美也子、北山めぐみ、山崎円)。そのなかで、学生の交流やキャリア形成が重要であるとの方針が打ち出されたことから、同年9月30日-10月1日に徳島県牟岐町の牟岐少年自然の家・出羽島をフィールドとした四国建設・建築系女子学生交流会を開催した。2018年にも香川県丸亀市本島町笠島をフィールドとした学生エスキス合宿を開催した。

しかし、女性会員に負担が偏っていたこと、またコロナ禍に突入したこともあり、活動が一時停滞していた。一方で、建築業界における男女共同参画の推進は重要な課題であり、学会本部からも各支部での活動推進が求められた。そこで、2023年度に四国支部男女共同参画推進委員会として各県から2名の委員を募り再始動することとなり、準備期間を経て2024年10月12-14日に徳島県三好市ウマバ集落にてフィールドワーク合宿を開催した。

実施した結果、参加学生の満足度は高く、「次年度も開催してほしい」、「今回は提案型が多かったので次年度は実践型としてはどうか」などのアイデアが生まれ、引き続き2025年度もフィールドワーク合宿を企画するに至った。

2025-2026年の男女共同参画推進委員を下記に記す。

[男女共同参画推進委員会委員(2025-2026)]

委員長 北山めぐみ

愛媛:安藤雅人、眞田井良子

香川:大西泰弘、釜床美也子

徳島:池添純子、山田宰

高知:東哲也、北山めぐみ

## 2. 合宿型ワークショップの開催に向けた事前準備

2024年度の合宿において次年度も開催してほしいという学生たちからの強い要望に応じて、今年度も引き続きフィールドワーク合宿を企画することとした。しかし、本事業は男女共同参画の予算では賄えないことから、新たに学生キャリア形成ワーキンググループを立ち上げるとともに、会場の運営を担う一般社団法人四国まんなか創造推進協議会(以下、協議会)の協力を得ることで実施が可能となった。

2025年度は合宿実施までに計4回の委員会を開催した(表2-1)。

第1回では、実施日時の確認、開催趣旨の確認、協議会からの要望について確認した。開催趣旨は昨年度に引き続き、「豊かな地域での暮らしや多様な働き方を知り、四国で働く技術者の育成に繋げる」ことを目標とした。また、開催趣旨に基づき、徳島市・佐那河内村・東京の3拠点で設計活動に取り組む高橋広樹氏(かたちとことばデザイン舎)にレクチャーを依頼することとした。

第2回では、参加費の検討、広報先の検討などを行った。協議会の支援が得られたことから、参加費を昨年より2000円引き下げ、8000円とすることにした。また、四国内に広報をしたのち、定員に余裕がある場合全国にも呼びかけ、四国での取り組みをより広く周知することとした。

第3回では現地を訪問し、事前に地域ニーズの確認と協議会との役割分担、自治会長への挨拶を行った。地域住民がもっと提案や発表会に関われるとよいという意見があり、地域への周知を強化することとした。協議会については、協議会の活動内容を参加者へレクチャーすること、また、資料の提供、最終発表会にも参加いただくことを確認した。

第4回では、現地調査を受けて活動テーマをいくつか想定し、必要な資料を確認した。また、当日の運営準備や役割分担を行った。特に今

年度は全国に参加者を募った結果、東京や九州等の各方面から集まることとなったため、フォームを用いて事前に到着時間や交通手段の把握を行った。また、参加人数も増加したことから、送迎にはジャンボタクシーを手配した。

表 2-1 2025 年度委員会開催記録

<p>R7 第 1 回男女共同参画推進委員会 2025 年 6 月 16 日 (月) 11~12 時 実施形態：Web 会議 出席者：委員 7 名</p>
<p>R7 第 1.5 回男女共同参画推進委員会 2025 年 6 月 24 日 (火) 13~14 時 実施形態：Web 会議 出席者：1 名 打ち合わせ先：高橋広樹氏 (かたちとことばデザイン舎)</p>
<p>R7 第 2 回男女共同参画推進委員会 2025 年 7 月 7 日 (木) 11~12 時 実施形態：Web 会議 出席者：委員 7 名</p>
<p>R7 第 3 回男女共同参画推進委員会 2025 年 9 月 2 日 (火) 9 時半~18 時 実施形態：現地開催 (ウマバスクールコテージ・三好市周辺) 出席者：委員 3 名 打ち合わせ先：協議会 丸浦世造氏 ウマバ集落 大下氏、新田氏、大上氏</p>
<p>R7 第 4 回男女共同参画推進委員会 2025 年 9 月 4 日 (木) 10 時~11 時半 実施形態：Web 会議 出席者：委員 7 名</p>

主催：一般社団法人日本建築学会四国支部男女共同参画推進委員会  
協力：一般社団法人四国まんなか創造推進協議会



### 2025 建築学生フィールドワーク宿泊 2025.10.11 (土) -13 (月・祝)

昨年度に引き続き、四国のおへそ・阿波池田の斜面地集落「ウマバ」をフィールドに四国内の建築やまちづくりを学ぶ学生が集まり、四国の人や仕事・風景の魅力を知り、学生間・地域で活躍する人々との交流を深めることを目的とした会宿を開催します。2 回目となる今回は、2 泊 3 日でフィールドワークを行い、地域の暮らしを豊かにするものづくりやことばの第一歩を踏み出すことを目指します。四国内の建築系大学・高等教員・建築家等がサポートします。高校生、高専生、大学生、大学院生、若手建築士のご参加をお待ちしています！

● 参加費・申し込み方法  
参加費：8,000 円 (滞在期間中の宿泊・食費等を含みます。会場までの交通費は各自にてご負担願います)  
会 場：ウマバスクールコテージ (研修・宿泊共) (<https://umaba-sc.com>) 申し込みフォーム  
〒778-5251 徳島県三好市池田町白地ウマバ 464 番地  
参加申し込み：参加者ごとに Google フォームに入力してください。  
<https://forms.gle/754fCmRzCmLbYm6>  
申し込み締め切り：8 月 20 日 (水)  
※高校生の場合は、保護者の承諾をいただき、その旨をフォームに入力してください。  
参加定員：30 名 (定員を上回った場合には先着順となります)



● 阿波池田とウマバについて  
交通の要衝であった阿波池田は、幕末から明治にかけて刻まれたことによって栄え、現在は商家が並ぶ歴史的な町並みが見られます。吉野川沿いには平地が少なく、急峻な斜面地に縦列される農村が地域の繁栄を支えました。阿波池田の町を一望できる斜面地集落・ウマバでどんな暮らしが営まれたのでしょうか。風景の中からそのヒントを探ってみましょう。会場となるウマバスクールコテージは、廃校となった馬場小学校を宿泊・研修施設としてリノベーションし、三好市の企業や市民からなり、持続可能なまちづくりを目指して様々な事業に取り組み (一社) 四国まんなか創造推進協議会によって運営されています。



コテージから見える早稲の風景

● スケジュール  
10 月 11 日 (土)  
集合：電車利用の場合は 13 時に JR 阿波池田駅集合し、ウマバへ送迎します。  
自家用車で来る場合は 13 時半までに直接ウマバスクールコテージへお越しください。  
13:30 ウマバスクールコテージに集合  
14:00-16:30 総括説明、グループ分け、地域の概要説明、フォームワーク  
16:30-18:00 レクチャー 講師 高橋 広樹さん (株式会社 かたちとことばデザイン舎)  
18:00~20:00 BBQ 懇親会  
20:00~ 班ごとにフィールドワークの振り返り、自由時間  
10 月 12 日 (日)  
9:00-10:00 フィールドワーク中間報告会  
10:00-18:00 班ごとにフィールドワーク (昼食はお弁当を用意)  
17:00 食事担当にて夕食準備・夕食  
20:00 自由時間 (お風呂・エスキースなど)  
10 月 13 日 (月)  
9:00-10:00 発表準備  
10:00-11:30 発表・講評  
12:00 解散・阿波池田駅へ送迎 (希望者は MINDE 見学)  
! 注意!  
・スケジュールは、多少変更する可能性があります。変更があった場合には改めてご連絡します。  
・基本的に混合参加者で協力して自炊を行います。アレルギー等がある場合には、食材持ち込み・自炊が可能です。  
・宿泊は男女別のドミトリーです。(施設概要をご確認ください。 <https://umaba-sc.com>)  
・万が一の怪我等に備えて保険に加入します。  
● 持ち物  
着替え、タオル、洗濯・洗面用具等 (施設概要については会場 HP にてご確認ください)  
フィールドワーク：エスキースに必要と思われるもの (スケッチブック、カメラ、PC、画材、コンベックスなど)  
● 問い合わせ  
一般社団法人日本建築学会四国支部 [ajsc@vesta.ocu.ac.jp](mailto:ajsc@vesta.ocu.ac.jp)

図 2-1 参加者募集チラシ

### 3. 建築学生フィールドワーク合宿 2025

#### (1) 実施概要

実施概要を以下に示す。

#### 開催趣旨

男女共同参画とは男女が分け隔てなく働ける社会づくりを目指す概念であるが、少子高齢化や若手の都市部への人口流出が進む四国においては、四国で働くことの魅力や多様な働き方の可能性を若い世代に伝えることの重要性から、これまでも学生合宿等を企画してきた。コロナ禍を経た現在、多様な働き方のさらなる拡大や選択肢の広がりが見られることから、四国で暮らす人々や仕事、風景の今を体験し、参加者自らが地域と交流し、リサーチ・提案を行うことで理解を深めることを目指したフィールドワーク合宿を開催する。2回目となる今回は、2泊3日でフィールドワークを行い、地域の暮らしを豊かにするものづくりやことはじめの一步を踏み出すことを目指す。

日程：2025年10月11日(土) -13日(月)

会場：ウマバスクールコテージ

〒778-5251 徳島県三好市池田町白地ウマバ  
464番地

参加費：8,000円

参加者：26名(東京理科大学・神奈川大学・  
熊本大学・香川大学・早稲田大学・九州大  
学・立命館大学・高知工科大学・東海大学・  
東京工芸大学・徳島大学・徳島文理大学・高  
知高専)

#### 現地サポートメンバー

東哲也(建築設計群 無垢)

安藤 雅人(日本 ERI)

池添 純子(鳴門教育大学)

大西 泰弘(田園都市設計)

北山 めぐみ(高知高専)

眞田井 良子(眞田井良子建築・まち育て

研究所)

山田 宰(徳島文理大学)

#### 後方サポート

釜床 美也子(香川大学)

#### レクチャー講師

高橋 広樹氏(かたちとことばデザイン  
舎)

#### ヒアリング協力

丸浦 世造氏(四国まんなか創造推進協議  
会)

東 周司氏(再生工房リヴァイブ)

ウマバ地域の5名のお宅並びに集落の皆様

#### スケジュール

10月11日(土)

13:45-15:00 趣旨説明、地域の概要説明  
協議会の活動

ツリーハウスの紹介など

15:00-16:30 まちあるき

16:30-18:00 レクチャー

18:00-20:00 BBQ 懇親会

20:00- 振り返り・自由時間

10月12日(日)

7:00- 食事担当(1)にて朝食準備

7:30-8:30 朝食(おにぎり・味噌汁)

9:00-9:30 中間報告会

9:30- 地域の方へのヒアリング・  
フィールドワーク

12:00頃 班ごとにお弁当

13:00- グループワーク

17:00- 食事担当(2)にて夕食準備

18:00- 夕食(キーマカレー)

20:00- 自由時間

10月13日(月)

7:00- 食事担当(3)にて朝食準備

7:30-8:30 朝食(おにぎり・味噌汁)

9:00-11:00 発表・講評

11:00 解散

## (2) 集合・ガイダンス

スタッフは、買い出し担当・送迎担当・会場担当に分かれて午前中に準備を行った。高速バスでやってきた学生が最も早く11時頃に到着し、スタッフや学生と共に集落内の蕎麦屋「雲海」にて昼食を取った。お店では自治会長と挨拶を交わし、すだちや柿・きゅうりをお裾分けいただいた。13時45分に参加者全員が集合し、ガイダンスを行った。主催者から開催趣旨の説明、参加者の自己紹介、フィールドワークのテーマ発表、ウマバ地域の紹介、昨年度の成果紹介を行った。

テーマは昨年に引き続き、「ウマバに暮らす人・訪れる人がちょっぴり・たっぷりハッピーになる提案」とした。

参加者は、高専3年生から修士2年生まで幅広い年齢・学校から集まり、混合班編成となった。ウマバ地域の紹介については、昨年度の報告書を参照されたい。

また、2回目となる今回は、昨年度どのような提案を行なったかを簡単に説明することで、本事業が発展的なものとなるように心がけた。

その後、協議会の丸浦氏から協議会の活動内容や地域の課題に関するレクチャーを行った。まちづくりに関わる者として、空き家活用の難しさやスクールコテージの運用の課題などが説明され、今回の成果が単なる提案に終わるのではなく、何かまちづくりの一步となることを実践してほしいと参加者を鼓舞した。



写真 3-1 雲海での昼食風景



写真 3-2 ジャンボタクシーでの送迎



写真 3-3 ガイダンス資料に目を通す



写真 3-4 丸浦氏による協議会の紹介



写真 3-5 東氏によるツリーハウスの解説

次に、校庭へ移動し、前運営者時代に制作されたツリーハウスの建設経緯や設計意図を、設計者である東周司氏より解説いただいた。身近にある廃材や端材などを用いてもものづくりを行うことで、持続的な社会に向けた発信に取り組む東氏の話に興味深く聴講していた。

### (3) まちあるき

グループごとに 1 時間半のまちあるきを行い、地域への理解を深めた。はじめに眞田井委員よりまちあるきの方法についてレクチャーを行なった。まちあるきの視点として、集落の「タカラ」と「アラ」を探しながら歩き、見つけたものをポラロイドカメラで撮影し、記録することでアイデアの元にしていく。

班ごとにサポートメンバーが付き、お互いの自己紹介をした上で、資料として配布したウマバ地区の航空写真・住宅地図・馬場小誌に掲載された集落図を参考にしながら散策した。早々にまちあるきの中で出会った地域住民から聞き取りを行った班もあった。



写真 3-6 眞田井委員によるまちあるき説明



写真 3-7 まちあるきの準備



写真 3-8 まちあるきの様子



写真 3-9 まちあるきの様子



写真 3-10 まちあるきの様子

#### (4) レクチャー

東京から9年前に移住し、現在は徳島県佐那河内村や東京を拠点に仕事をする高橋広樹氏から、「あわせる、を考える」をテーマに、自身の働き方や地方で働く魅力についてプレゼンテーションをしていただいた。

まず、多拠点で働きつつ地方で暮らす経験から、地域に寄り添う姿勢の大切さが語られた。

「あわせる」には祈りや合掌など多様な意味があり、特に身近な素材を工夫して使う「ありあわせ」という営みに魅力を感じているという。ウマバ集落でも、段差を登るために置かれたブロックや曲げた鉄パイプなど、住民が手元にあるものを活かしながら暮らしを形づくる姿に地域固有の文化を感じ取れることが紹介された。また自身の料理でも残り物を生かすなど、日常の中で工夫する面白さを実感していることが紹介された。

次に、地方で生活する上で大切にしていることは、人や環境に「合わせていく」ことだと述べられた。近所の高齢者との何気ない会話や飲み会の中で地域を知り、自分の時間を少しずつつくっていくことが、まちづくりの基盤になると話した。教育活動にも力を入れ、学生が実際のプロジェクトに携わる仕組みをつくっており、「何でも面白い姿勢」を育てることを重視している。建築は時間を超えてコミュニティをつなぐ力があり、自身のライフワークでもあるという。

続いて、自らを支える言葉として「九転十起」「群れるな されど集わん」「賛否両論あることをする」を挙げ、挑戦や独自性を大切にする姿勢を示した。これまでの経歴は、都市計画とデザインを横断して学び、東京でコンサルタント会社等へ勤務していた。徳島へ移住後、設計事務所勤務を経て独立。「かたちとことばデザイン舎(カタコト)」と、「とくしま建築学生スタジオ」を立ち上げ、人材育成・まちづくり・ものづくりを三本柱に、地域の小さな価値を拾い上げる活動を続けている。

講演の後半では、自身が手がけた住宅、店舗、保育園などの設計事例も紹介され、地域に根差した建築の実践が具体的に示された。



写真 3-11 委員長から高橋氏の紹介



写真 3-12 高橋氏によるレクチャー

### (5) 交流バーベキュー

ウマバスクールコテージでは、BBQ を通じた交流を大切にしていることから、今回も事業初日に交流会を開催した。地域への周知などに協力いただいた自治会長をはじめ、地域の方々、四国まんなか創造推進協議会の丸浦氏、かたちとことばデザイン舎の高橋氏にもご参加いただき、学生との交流を深めていただいた。これにより、地域の課題やニーズをより深く理解する貴重な時間となった。

さらに、自治会長から「次週の祭りで披露する獅子舞の練習がちょうど公民館で行われている」とうかがい、急遽その様子を見学・体験させていただく機会にも恵まれた。獅子舞の練習を通して地域住民の方々と交流をさらに深めた班もあり、学生にとって大変有意義な経験となった。



写真 3-15 公民館で獅子舞練習の見学



写真 3-13 推進協議会丸浦氏による乾杯



写真 3-16 まちあるきのまとめ作業



写真 3-14 地域の方々との交流



写真 3-17 夜中までテーマについて考える

## (7) 中間報告

2日目からは各班から1名を食事係として選出し、共同で調理作業を行った。朝食は炊き込みご飯と味噌汁、いただきものの柿を食した。

9時からは、初日のまちあるきや話し合いで出てきたアイデアを共有する中間報告会を行った。これは昨年度の合宿で、他のグループと重なるのは避けたいが、各グループがどんな提案内容を考えているのか見えづらいという意見があったことから、今年度新たに設けたものである。まちあるきで見つけた「タカラ」と「アラ」や、ヒアリングを踏まえた現時点での提案イメージ、「とにかく何かものづくりをしたい！」など各グループの要望を共有することができた。



写真 3-18 朝食風景



写真 3-19 中間発表

## (8) ヒアリング・フィールドワーク

10時からは、あらかじめグループごとに設

定した訪問先へヒアリング調査に向かった。集落の方の家々を訪問させていただくことで、話しに加えて、家や庭、畑などの土地利用や暮らしの様子をリアルに体験することができる。朝の中間報告を経て、まちあるきの経過をまとめたシートや具体的なアイデアを持って訪問し、地域が抱えている課題とのすり合わせや、意見交換が行われた。訪問先の方々からは昨年度より学生たちの考えがまとまっており、意見が述べやすく、とても良かったと評価をいただくことができた。



写真 3-20 ヒアリングの様子



写真 3-21 ヒアリング後の集合写真

昼食はグループごとにお弁当を食した。中には、景色が良いので訪問先のお家でいただく班もあった。午後はスクールコテージや訪問先でそれぞれ提案内容の具体化に向けた作業に取り組んだ。何らかのものづくりに取り組む班は、スタッフが付き添い、資材の調達のため

め、阿波池田市街へ出た。協議会の丸浦氏から建物の解体等の際にストックしていた木材などを提供いただくことができ、資材倉庫からイメージにあうものを探してスクールコテージに運搬した。のこぎりやインパクトなどの工具はあらかじめスタッフにて準備し、ビスや塗料など必要な資材はホームセンターで調達した。

夕食は共同で調理したキーマカレーに、協議会から差し入れていただいたトンカツを乗せ、豪勢な夕食となった。食事後も班ごとに制作作業に取り組んだ。今年も最も早く制作を終えた班は0時頃であり、夜中3時ごろまでプレゼンテーションに頭を悩ませる班もあった。



写真 3-22 資材の調達



写真 3-23 町の歴史に関する資料



写真 3-24 各班の作業風景（1班）



写真 3-25 各班の作業風景（2班）



写真 3-26 各班の作業風景（3班）



写真 3-27 各班の作業風景 (4 班)



写真 3-30 夕食の様子



写真 3-28 各班の作業風景 (5 班)



写真 3-29 夕食の準備

### (9) 成果公表会

成果公表会当日、早朝から完成した作品を現地に据え、発表用の写真を撮影したチームもあった。

二日目のカレーやとんかつ、ご飯と味噌汁で朝食をとり、9時から成果公表会を開催した。合宿の事前周知やヒアリングに協力いただいた地域の方々、レクチャーをしてくださった高橋氏をはじめ、建築学会四国支部の役員等も駆けつけてくださった。

5→4→3→2→1 班の順で発表することとし、各班7分程度の発表ののち、5分間の質疑応答時間を設けた。発表時の司会を、各グループをサポートしたスタッフが担当し、地域の方が発言しやすい環境をつくったことで、柔らかい雰囲気での公表会を進行することができた。提案内容の詳細については次章にて紹介する。



写真 3-31 早朝の現地設営



写真 3-32 成果公表会の様子 (5班)



写真 3-33 成果公表会の様子 (4班)



写真 3-34 成果公表会の様子 (3班)



写真 3-35 成果公表会の様子 (2班)



写真 3-36 成果公表会の様子 (1班)

発表後、すべての学生に対して、新居支部長より「地域実践活動奨励賞」を参加者に贈呈した。また丸浦氏からは、「学生の提案は非常に質が高く、地域にとって貴重な内容なので、形として残し、継続してほしい。地域としても協力を惜しまないので、今後も関わり続けてほしい。」とコメントいただいた。

自治会長からは、「学生の柔軟な発想やチームワークに感心した。昨年に続き、今年もありがとう。来年もぜひよろしく。」というお言葉があった。

新居支部長からは、「若者と地域住民の協働が素晴らしく、交流は大きな財産になる。学生が地域の魅力を見つけ、地域側も受け入れていることに価値がある。今回の提案も地域の知恵と学生の発想を合わせて実現して欲しい。」とコメントがあった。さらに「全国の大学から集まり交流できていること自体が、将来の財産になる。この経験を将来に生かして、日本の未来づくりに役立ててほしい。」とエールが送られた。

最後に公表会に参加いただいた地域住民の方と一緒に、集合写真を撮影した。

公表会終了後は慌ただしく荷物をまとめ、全国各地から集まった学生たちは思い思いに連絡先を交換するなどしながら解散した。



写真 3-38 参加者集合写真



写真 3-39 参加者集合写真



写真 3-37 地域実践活動奨励賞の贈呈

#### 4. 作品紹介

##### 1班「よせて集めて…」

集落の地域課題として、若者の流出や高齢化による集落維持の困難化、交流機会の減少、人手不足や予算不足といった現状に着目した。現地調査や住民へのヒアリングから、同地区には祭礼や共同作業、味噌・豆腐づくりなど多様な交流活動を通じて培われた強いコミュニティが存在することが分かった。また、空き家由来の廃材や倉庫に眠る資材など未活用の資源が多く残されており、住民の知恵や経験とともに活かせる可能性が感じられた。一方、コテージは未完成であり、拠点整備に向けた継続的関わりが必要である。

そこで、地域にある資源を活かしながら学生と住民が協働で拠点整備を進める「ブリコラージュ型ワークショップ」を提案した。地域の素材を寄せ集め、創意工夫してものづくりを行う手法で、費用を抑えつつ住民参加を促す点で現状課題に適したアプローチである。未利用資材の再活用と協働作業を通じて、拠点整備とコミュニティ強化の同時実現を目指している。

##### 提案

ブリコラージュとは  
その場にあるものを寄せ集めてモノづくりや修繕などを行うこと。

##### ウマバの資源



24

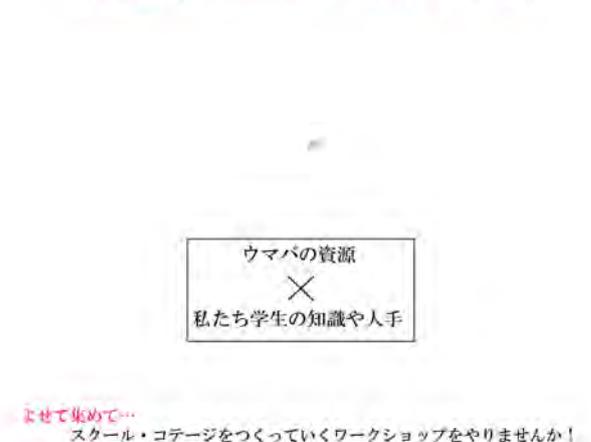
##### ウマバの資源



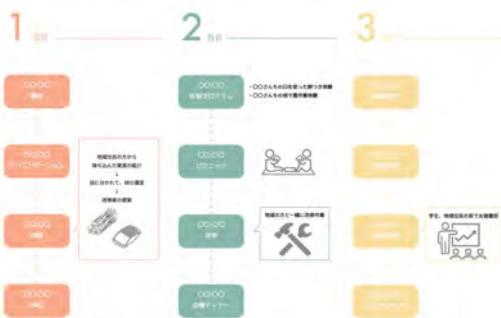
25

##### ウマバの資源

土地の魅力、ウマバの方たちの知恵・経験



29

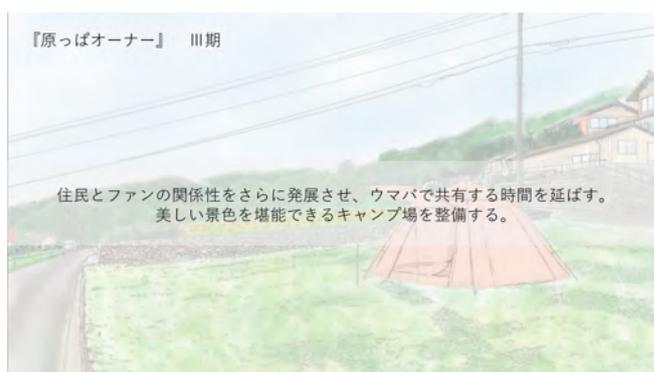
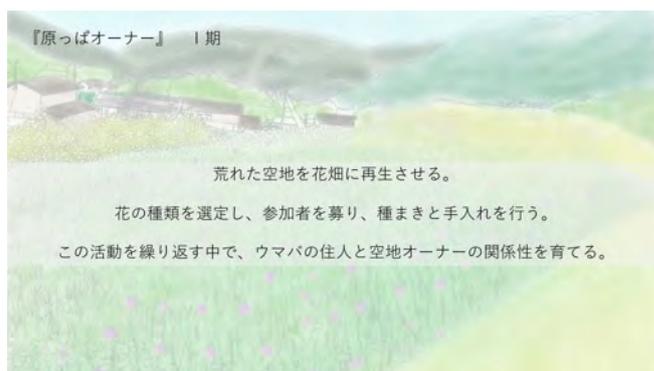


28

## 2班「ウマバのファンを増やしたい！」

フィールドワークと住民ヒアリングを通して、ウマバの魅力である温かい人柄、美しい景観、多様な農産物などの「タカラ」と、荒地地の増加や農業継続の困難、担い手不足、ブランド力の弱さといった「アラ」を整理した。特に耕作放棄地の増加と景観悪化は深刻で、住民自身も外部との交流を必要としている点がわかった。

こうした課題に対し、空き地を媒介に住民と外部の“ウマバファン”を結びつける「原っぱオーナー」制度を提案した。これはウマバに関心を持つ人が“オーナー”となり、住民と共同で空き地を管理し、種まき・手入れ・収穫を通じて関係性を深める仕組みである。取り組みは3段階に構成され、I期で花畑として荒地を再生し交流の基盤をつくり、II期で百花蜜の生産に発展させ、III期では景観を楽しむキャンプサイト整備によって滞在時間を増やす。最終的には外部に“熱烈なウマバファン”を増やし、長期的な関係人口を育む未来像が描かれている。



### ヒアリング調査のまとめ

- 農業**
- ・ハチミツがフルーティーでおいしかった
  - ・百花蜜
  - ・特産品、名産品が無い
  - ・サツマイモやトマト等いろいろ作ってる
  - ・農地法によって畑の転用ができない
- ウマバのハード面**
- ・荒地化が進む
  - ・長閑のみ、行政だけではムリ
  - ・車が必須
- ウマバのヒトやモノ**
- ・人は優しいが、積極性がない
  - ・リーダーがいない
  - ・買ってくれる人がいない
  - ・こだわりが無い
  - ・ブランド力が無い
  - ・継続してプロジェクトができない

少しずつウマバの住人と関わる  
外部の人からのリアクションが大きい

### 『原っぱオーナー』

#### ポテンシャルのあるたくさんの空き地

様々な作物を育ててきたが、  
継続できないことが多い

景色が良いのに充分その魅力が  
伝わりきってない

オーナーとは  
ウマバが好きで、ウマバの住民の空  
を共同で管理する人

定期的に種まきや手入れで住民と交  
をする。

空き地の活用で得た収穫物はオーナー  
ンなどで共有する。



### 『原っぱオーナー』

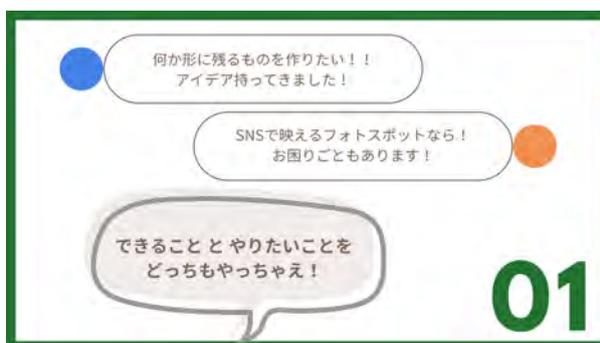
#### 将来的な展望

5年で終わることなく、活動が流動的に長期的に続く。  
5年、10年とウマバに人々が関わり続け、ウマバならではの  
の関係性とファンが定着する。  
最終的な目標は、熱烈な「ウマバファン」を獲得すること。

### 3班「残すことで、つなぐ。」

ウマバ地域の魅力発信と交流促進を目的に、地域内活動を“形に残す”ことに重点を置いた取り組みを提案した。現地調査から、子ども食堂は地域コミュニティの中心として重要な役割を果たしている一方で、認知不足やアクセスの難しさが課題として浮かび上がった。また、美しい景観が外部の来訪者に十分伝わっていない点も問題とされた。

そこで、①子ども食堂の情報発信を強化するInstagram アカウントの開設、②公民館をGoogle マップに登録し道案内を改善、③温かみのある手作り看板を設置、④絶景を切り取って発信できる写真フレーム(フォトスポット)の制作を行った。これらの取り組みは、地域行事の周知機能を高めるだけでなく、住民と来訪者の交流を生む仕掛けにもなる。特にフォトスポットは、ウマバの風景価値を視覚的に表現し、地域の魅力を広く共有する効果が期待される。制作物が今後も活用され、ウマバで暮らす人・訪れる人が“ちょっぴり・たっぷりハッピーになる”ことを願っている。



**01 Instagramの開設**

いろんな人に子ども食堂を利用してもらいたい…  
子供食堂の魅力を発信するため、  
Instagramアカウントを開設しました。  
皆さんも『#』投稿をお願いします!

**02 Googleマップ登録**

公民館への道が複雑で迷子になる…  
→初めて訪れる方でも分かりやすいように、公民館をGoogleマップに追加しました。これで、人が集まりやすくなることを期待しています。

**03 こども食堂の看板制作**

**04 穴場の馬場**

**風景の切り取りアート**

写真フレームの設計&制作  
ウマバが持つ風景の魅力を最大限に伝えるため、写真スポットを公民館に設置。

→ウマバに訪れる人口増加、ウマバの絶景を知ってもら効果期待できます

**05 まとめ**

スクールと住民  
周辺の地域とウマバ  
私たちとこの場所  
残したものと次の参加者

#### 4班「このくらしをまもる。」

ウマバの暮らしの豊かさとして、景観の美しさ、獅子舞などの伝統文化、農的営み、人の温かさが地域の魅力として際立っていることがわかった。一方で、景観を損なう放置竹林や担い手不足など、豊かさが失われかねない課題も確認された。

こうした状況を踏まえ、「ウマバラしさをみえる化し、豊かさを存続させる」ことをコンセプトに、3つの“みえる化”を提案した。①かぼちゃ祭りのかぼちゃを活用し、農や季節の恵みを象徴する「かぼちゃランタン」、②獅子舞の動きや石垣の意匠を取り入れた「竹灯り」による景観演出、③住民や来訪者の思いを共有する「竹ポスト」である。これらの仕掛けは、地域の風土・暮らし・人の思いを可視化し、住民と外部の人々が関わり合うきっかけをつくる。最終的に、ウマバの暮らしを未来へ受け継ぐ土台となることを期待している。

☑コンセプト解釈

**「くらしをまもる」**

なにをすれば“くらし”をまもれる？  
 伝統・農業・景色・人の暖かみ。  
 守りたいと思った豊かさがたくさんあった。

**「豊かさを存続させる」**

☑コンセプト解釈

**「豊かさを存続させる」**

今のウマバのくらしを阻害せず、  
 今ある豊かさを保ち、広める。

**「ウマバラしさを“みえる化”する」**

☑3つのみえる化

①かぼちゃランタン

“暮らし”をみえる化



②竹灯り

“風土”をみえる化



③竹ポスト

“人の思い”をみえる化



☑①かぼちゃランタン

農業・イベント・景色      外部との関係

- かぼちゃ祭りのかぼちゃを活用
- ウマバの地にある恵みをアイコン化
- ウマバから眺める景色をアイコン化

☑②竹灯り

伝統・路      放置竹林・景色疎外

☑③竹ポスト

人の暖かさ      竹林・外部との関係

未来図



## 5班「ウマバフラワーロード」

ウマバの斜面集落に根付く“花を愛し育てる文化”と“自給自足の精神”を地域の財産と捉えた。かつて、ウマバは花づくりで、徳島県・全国から表彰されるほどの実績を持ち、その文化は現在も地域の暮らしに息づいている。一方で、住民の運動不足や交流機会の減少などの課題も確認された。

そこで地域の歴史と魅力を再び生活の中に取り込み、彩りと交流を育む仕掛けとして「ウマバフラワーロード」を提案した。斜面地の地形と多様な花々を活かした散歩道の整備に加え、住民が季節の花を差し替えて参加できる“フラワーロードマップ”を制作した。マップは花と住居の配置を立体的に示し、四季の移ろいを可視化するツールとなっている。これにより散歩促進、住民交流、景観への誇りの醸成が期待される。住民と来訪者が花の文化を介してつながる場づくりを目指している。

### II.花の街、馬場

- ◇以降、栽培量こそ減少し産業化はされていないが...
- その歴史を受け継ぎ、今でも多くの花がウマバの街では咲き誇っている

現在、ウマバの人々には

「花を始めとした植物を愛し育む心」と「自給自足の精神」

が脈々と受け継がれており、これらがウマバ地域の**タカラ**であると我々は考えている。

### II.花の街、馬場



その3つの価値をつなぐ、提案として

「ウマバフラワーロード」

を計画した。

## III.ウマバフラワーロード



- ◇高低差による景観と多様な花々の咲く道  
住民・観光客双方が満喫できる散歩道
- ◇地域住民の方々が花づくりや手入れに関わる  
■かつて培われた「花の文化」と「人のつながり」が再び育まれていく。



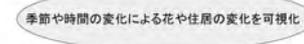
### III.ウマバフラワーロード

◇フラワーロードマップの機能



### III.ウマバフラワーロード

◇フラワーロードマップの機能



住民側

- ・花の手入れのモチベーション
- ・地域交流のきっかけ作り
- ・楽しい散歩道としての活用

観光客側

- ・フラワーロードを通るきっかけに
- ・東馬場の景観×花の美しさの発見へ
- ・地域の人との交流

・フラワーロードの現状把握

・フラワーロードマップを彩ることの楽しさ



### III.ウマバフラワーロード

ねらいと効果

- ・地形と花の位置関係を立体的に理解できる
- ・季節ごとに花を入れ替えることで、展示が変化し続ける
- ・地域の人々が花を育て、模型の花を飾る活動を通して、花の文化と人のつながりを再興できる

立体模型は、フラワーロードの姿を「見るだけで感じる」ための地図であり、

花を挿して飾ることで、ウマバの自然・季節・人の営みが一体となる表現を目指した。

模型そのものが、「地域の花とともに暮らす地域の姿」を伝える作品となっている。

### III.ウマバフラワーロード(まとめ)



今後の展望

模型的なフラワーロードマップを彩ることによって、実際のフラワーロードマップにも彩りが溢れるような連関へ

## 5. 参加者アンケートから見る成果と課題

合宿前後に web フォームを用いた参加者アンケートを実施した。参加動機や事前の期待から、実施後の学び・満足度・改善点までの一連の傾向を把握した。

アンケートは事前 26 名 (100%)、事後 23 名 (82%) から回答を得た。

### (1) 情報入手経路の傾向

「本合宿のことをどのようにして知りましたか?」という設問に対して、所属する学校の教員からの情報が 50%、学会からのメールが 43%となった。集落やまちづくりについて研究する学生が教員から勧められたという学生が複数おり、また、学会員である大学院生がメールを見て興味を持ってくれたものと考えられる。本事業が、男女共同参画の啓発のみならず、学生自らの研究や学びを深める機会となっていることが窺われる。

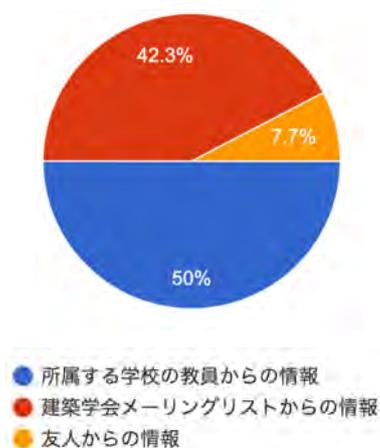


図 5-1 情報入手経路

### (2) 参加動機

「なぜ、この合宿に参加しようと思いましたが?最も当てはまるものにチェック」という設問に対して、プログラム内容への関心が最も高かった。また、それ以外の参加動機についても聞いたところ、他大学との交流、参加地域への興味が最も多かった。また、自由記述においても他大学や地域の方々との交流を期待する声や、集落同士のネットワーク、ワークショップ等への興味に対する期待があった。フィールドワークや四国内の地域へ実際

に関わることのできるプログラムに学生たちが関心を持っている様子が窺われる。

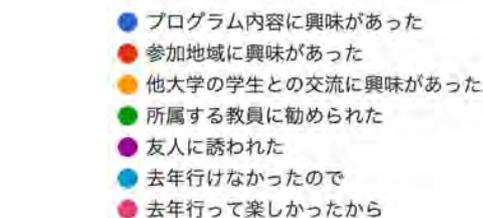
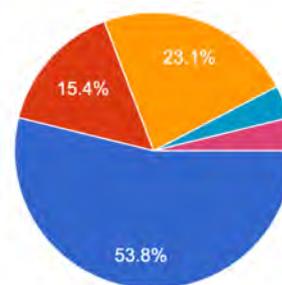


図 5-2 最も当てはまる参加動機

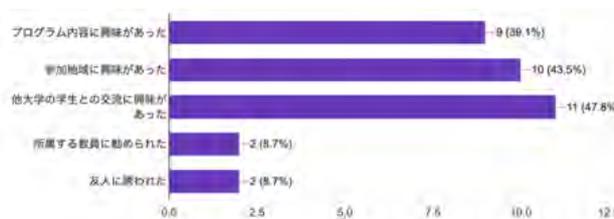


図 5-3 その他の参加動機

### (3) 参加者の出身地と卒業後の進路

「参加者の出身地」をきいたところ、北海道および関東から九州まで全国様々な地域の出身者が参加した。参加校も概ね関東から九州にわたっていたことから、比較的アクセスの良い地域から参加してくれたことがわかる。

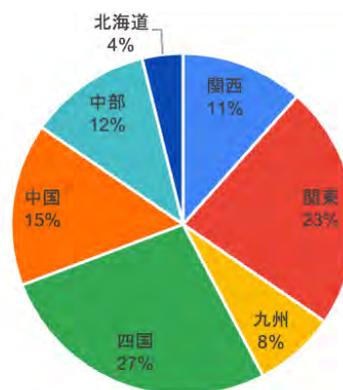


図 5-4 参加者の出身地

次に、「卒業後の居住希望地」をきいた結果、

出身地と答えた学生は 27%に留まり、出身地とは異なる都市圏や地方、海外を志す学生もいたが、半数は未定であった。

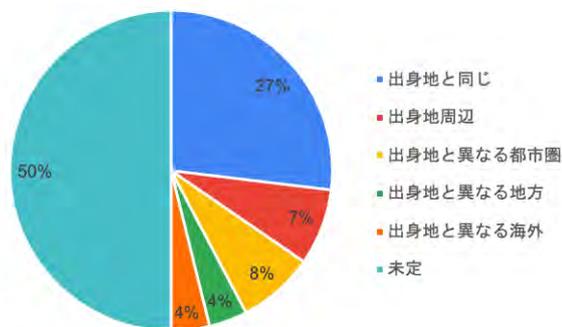


図 5-5 就職希望地

これに関して、卒業後の進路をきいた結果、進学予定の学生が4割おり、そのため卒業後の希望居住地为未定という回答が多くなったものと思われる。一方、就職という回答の中では設計事務所と回答した学生が最も多かった。これから建築設計等を担おうとする学生に対して、多様な暮らしや働き方を知る機会を提供することは重要なことと考える。

#### (4) 学びに対する成果

本事業のプログラムごとに、事前の興味関心と、事後の学びの状況について、5段階評価にて質問を行い、その回答を図に示す。なお、参加していないという回答があるのは、

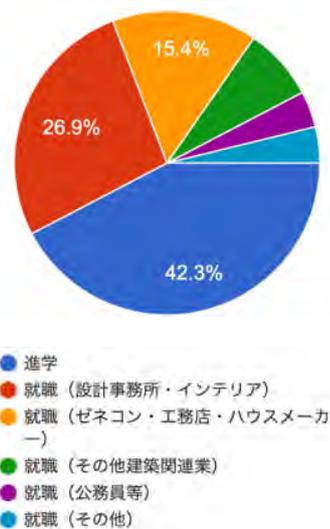


図 5-6 卒業後の進路予定

1名が家庭の事情のため1日目で帰省することになったためである。事前アンケートでは、地域や集落に対する興味が高かったことから、現地歩きやフィールドワークへの興味が高くなり、レクチャーやグループワーク、最終発表等については強い興味には至っていない。しかし事後アンケートでは、ほとんどのプログラムで「多くの学びがあった」という回答が得られ、学びの満足度は高かったと言える。特に後半のプログラムに向かうにつれてほとんどの参加者が深い学びを得られており、2泊3日という時間をかけたプログラムの意義が窺える。

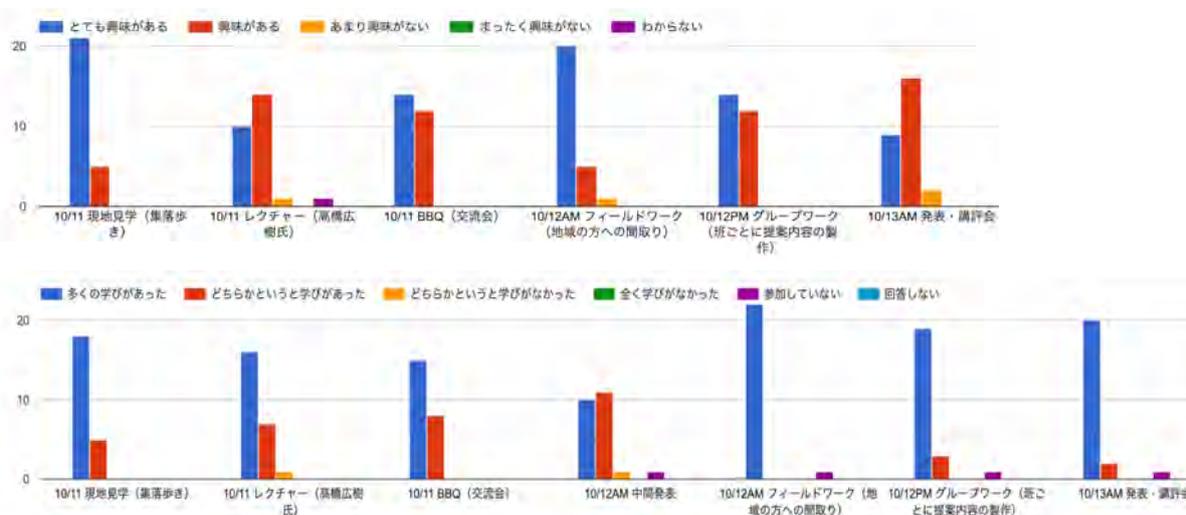


図 5-7 プログラム内容に対する事前の興味 (上) と事後の学びの成果 (下)

## (5) 「学び」に対する記述

本事業における学びを参加者自身の言葉で聞かため、自由記述で「最も大きな学びはあなたにとってどのようなものだったか」をきいた。参加者のいずれもが、地域に対する認識が深まり、地域のつながりや声を聞くことの大切さ、豊かさなどに気づいている。また、限られた期間で幅広い学年・地域の仲間と考えを形にしていく過程を通して、多様な価値観への理解の深まりがあったことが窺える。主なテーマの出現数は以下のとおりである。住民の声・地域交流: 21人/多様性・協働・コミュニケーション: 9人/過疎・山村理解: 4人/視点の転換・アラとタカラ: 5人/実践・ものづくり: 11人/時間軸・未来志向: 2人であった。回答全文を以下に示す。

<p>地場と立場の関係です。具体的には、馬場というひとつの集落におけるひとつの要素に対し、住民の方々は何とも思わないが、外部から来た人にとって魅力に感じたり、外部の人の中でも意見が変わったりすることです。これは地域にたつ建築を考える上で、最も重要なことでもあり、ひとつの生の地場に対し、どういう向きからスポットライトをあて、どう形にするかという流れを改めて意識することが出来ました。</p>
<p>当たり前だと思っていたことは実は当たり前ではなく、小さな気づきからも大きな歴史、当時の人々の思い、環境までも考察することが出来る。そういった大きな学びがありました。視点を交えることで、アラもタカラになる、つまり良いも悪いも表裏一体だということに気づけた。良さを注力する力、敷地を観察しポテンシャルを活かすスキルはこれからの設計にも大いに役立つと思う。</p>
<p>僕の学びは、「過疎化した集落」に対する肌での理解だった。大学では時折、農村集落や過疎化した都市における研究・建築設計を学ぶことがある。いつも学生なりに、一生懸命敷地分析や事例分析、データ分析をして提案するが、それでも本当の声が置き去りにされている気がしていた。敷地の伝統文化や高低差を着想に据えて提案しても、そこに住む人が何を思っているのか、想像や妄想にすぎないことが多い。この3日間のワークショップでは、大上さんをはじめとする「暮らしている人」たちの生の声を聞いて、その上で提案をあれこれ考えることが出来た。僕はその過程にとっても満足した。生の声を聞いたことで、過疎化した集落の人達は、今の幸せが好きで、ムラが好きで、景色が好きで、暮らしが好きなんだと肌で感じる事ができた。特にウマバで出逢った住民の方々からは、暮らしが好きであることと、外部の人々に対する純粋な優しさを持つことを感じ取れた。これからの山村集落における風土を、この3日間の経験から引っ張り出すことになりそう。</p>
<p>これまで、こんなのがあったらいいなを考えてプレゼンでまとめる授業やプログラムはしたことがあったが、それは自分で思った課題だけだったり初めからテーマが決まっていたりしたから、今回の合宿で、まずは自分たちで実際にその地を歩いて、見て、感じた、宝とアラをまとめて、その後住民の方がどんなことを望んでいるのかを訪問し</p>

<p>て対面で聞くことで、自分たちが考える馬場の課題と地域住民の方が思う課題とのギャップがあったことを知り驚いた。長い時間座って考え続けるよりも、実際にその地域を歩いて、そこで暮らす人と交流することが私の中では1番大事なことだと思った。また、大学院生から高校生までいたことで色々な視点からの意見も出ておもしろかったし、「これがあったらいいな」を案を出して終わるのではなく、物を作ってそこに残していくことは経験したことがなかったので、いい経験ができたし、学ぶことが多くあって楽しかった。</p>
<p>今回の合宿では、地域に根ざした建築や都市計画のあり方を実際の暮らしの中で体感できたことが最も大きな学びでした。住民の声を直接聞き、図面上では見えない生活のリズムや風景の魅力を知ることで、建築をつくることよりも寄り添う姿勢の大切さを実感しました。地域や敷地を見に行くことはあっても、実際に住民の方の声を聞く機会はなかなかなく、ウマバのととてもすてきな住民の方々とともに過ごすことができ、本当に貴重でありたい体験でした。</p>
<p>出身や性格の異なるチームをまとめる経験、また郊外における地域に密着した人々に暮らし方やそれを支える多様な立場の人々の働き方を学ぶことができた。あと、単純に楽しかったです！</p>
<p>文化・財産などは守ろうとして守られてきたものもあるが、やはり、その土地の特産や気候風土にあったものは無意識的に継承されるため、特徴的なものが文化・財産になっている。</p>
<p>今回の合宿での最も大きな学びは、実際にその場を訪れて自分の目で見て体験することの大切さを実感したこと。また、自分たちだけの考えで進めるのではなく、地域の人々の声に耳を傾けながら活動することの重要性も学びました。うまばの方々の温かさや、うまばならではの魅力を多く発見できた貴重な経験となりました。</p>
<p>大きな学びは人との交流だ。集落の人は優しくはっきりと物事を言ってくれるおかげで今回の魅力と良くないとこを理解できてそれに対する対策や伸ばすことができてよかった。大学生の人達も高校生とは違ってスピード、まとめ力、語彙力が凄まじく自分に発破をかけることができたので意欲の向上にもつながったので大きな学びと成長になったと感じた。</p>
<p>今回の合宿で最も大きな学びは、「提案を考える際の時間軸の広さ」と「多様な価値観との向き合い方」でした。今いる地域住民だけで完結するのではなく、20~30年後の移住者や観光客、次世代の人々にどう繋げていくかを想像しながら考えることは、特に難しく感じました。また、参加者それぞれが異なる環境で育ってきたため、思いもよらない面白い発想が多く出てきました。一方で、進行する中で解釈のズレが生まれやすいよう、どう分かりやすく伝えるかに苦戦しました。この経験を通じて、未来を見据えた視点と、他者との丁寧なコミュニケーションの大切さを実感しました。</p>
<p>地域内での人同士の繋がりが強く、各人がそれぞれ生きるのではなく、一つの共同体として生きていることを強く感じた。現在はそのつながりの中で、外部との繋がりも受け入れ、ウマバに快く迎え入れるところに、未来に向かう力強さを感じた。</p>
<p>今回の合宿で最も大きな学びは、「仲間と協力して考えを形にしていくことの大切さ」と「同じ場所でも視点によって見え方が大きく変わる」ということです。2回目の参加でグループが変わったことで、前回とは異なる意見や考え方に触れ、新たな視点から地域を見ることができました。多様な意見を取り入れることで、より深く場所の魅力や課題を理解できたことが大きな成長につながりました。</p>
<p>私が所属する研究室では、地域を構成的に見て(場所の地</p>

形と住居地、田畑、墓地・神社などの配置関係)、その場所の魅力や特徴をまとめた上で、それに対する建築的な提案を思考している。これに関して個人的には、地域を離れて見ているという俯瞰的な感覚であった。今回の合宿では、住人の方々と関わりを持ち、その地域がより良くなる提案を考えるということで、より具体的に生々しくその地域に入り込んでいくような感覚があった。それ故、提案に関しては直前で苦心したし、あれが良かったかと言われるら腑に落ちないのが正直なところである。しかし、この経験は普段体験できないものであり、またこれから地域を考えていくうえで絶対に必要なことだと感じている。地域にがっつり入り込んで、そこがより良くなることを苦心しながら考える、という経験が自身の大きな「学び」だったと思う。

育った環境も年齢も立場も違う人たちがお互いのことを考えながら、今の自分にできる最大限を行っていた合宿だと1日たつて感じてます。建築の学生のプロジェクトではあったもの大会のような形で競い合うのではなく、健闘を讃えあう雰囲気があるのがいい空間でした。物事一つに特化した人を集めるのもいいですが、良いところも悪いところも凸凹しながら補い合えるようなメンバーが最高なんだと感じました。

現地の人の生の声を聞いて、短い時間でプログラムを提案したこと。限られた時間での出力自体は、初めてではなかったが、今までは着目したことや、こうあったらいいなを、自分が思うところからの発信で行っていた。だが今回の合宿では、現地の方のヒアリング調査をしたのちに、しっかりと考えてまとまりのあるものとして出力することの面白みと大変さを実感した。自分たちが感じた町の魅力や課題について、住民の方も同じように思っている部分や気づいておられなかった部分の差が、ヒントになることを身をもって実感した。また、学年や大学が違う学生と真剣に話し合っ、一つのことに向けて何かをすることは楽しかった。同じ大学なら考え方のベースは似るところがあるが、違う大学だと学んでいることも少しずつ違うので、注目する部分が異なって様々なアイデアや考えが飛び交って、楽しい議論になった。

事前資料で背景、フィールドワークで実況やハード面を、地元の方へのヒアリングでソフト面を知ることができ、一体として理解できたのが面白かったです。また、しきり、山口さんが、「当たり前」とおっしゃっていて、やはり住んでいる場所によって当たり前は違い、人の暮らしに改めて興味を覚えしました。

実際にフィールドワークを通して自分たちの班で感じた魅力とそれを向上させる提案に、地域住民の方々の需要や要望を合致させ、どのようなものを計画・設計するか思案するのに学びと面白みを感じた。限られた時間内での施行は、設計と同時に進行的なものとなっており、臨機応変に行動する必要が生じて新鮮な経験が出来たと考えている。

普段資料や事例を紙やデータでしか見てこなかったが実際に現地に行きさらにそこでまちのために何かをするという体験は初めてで、普段考えない素材の選定から使いやすさまでの設計など具体的に実践的な活動を行ってとても良かった。また自分とは考え方が全く違う人達とディスカッションを行う事で、自分では考えない様な事も出てきたりしたためとても良い経験になりました。

修士2年・班長としての学びは、チームの方向性や流れを作業の割り振り、誰に何をやらせてもらうか、どれくらい休憩を取るかを考えるのは大変だったという印象でした。加えて、学部生の三人のフレッシュなアイデアをどうやって昇華するかにも腐心しました。個人としては、山間部集落に興味があったので、今回のWSは非常に良い機会になりました。具体的には、発表で言われた丸浦社長の言葉の

「1週間もすればみんなウマバのことも忘れてなかったことになってしまう、(中略)このPJには担い手みたいな存在が欠けてるんじゃないか」にハッとさせられました。どうしてもWSで提案すると都市に住む人間の目線で発言してしまったり、それっきりであとは知りませんみたいな態度を無意識に取っていたのではないかと思い自分自身反省しました。と同時に、これからも自分がウマバに継続的に関わっていくことがどうしたらできるだろうと考える機会を得られたことは大きな財産になりました。そして、都会から来た私達をウマバの人がとても暖かくもてなしてくれたことが何より嬉しくて、何年かかるかわからないけどいつか返したいと思いました。

今回の合宿で最も大きな学びは、地域の人の関わりを通してまちのあたたかさに気づけたことです。まち歩きでは、地域の方に「頑張ってる」と声をかけていただいたり、柿を分けてもらったりと、人の優しさに触れました。現地での出会いを通して、まちづくりは人とのつながりから生まれるものだと感じました。

地域で使われる“モノ”をチームで協働して作ったことである。大学で土木系を専攻している私はこれまで多くのWSに参加してきたが、提案で終わるものが大半で“モノ”を作る機会はなかった。今回の合宿では建築学科のメンバーの多様な意見と地域住民の声を聴き、より良いウマバのためにどのようなものを作るか、という経験ができてとてもよかった。モノづくりの楽しさに気づくことができ、今後のキャリアを考える中でターニングポイントになったと思う。

今回の合宿で、もっとも大きな学びは、地域をよくするための提案は必ず、建物を建てる事ではないと再確認できたことです。建築について学んでいる中で建物を計画してよりよくしていく方法ばかり考えていましたが、町をよくする仕組みについて考えることも必要だと感じました。また、アラとタカラの考えをもって地域を見ることでこれからのその地域だけの問題や良い部分を発見できると思います。

(6) 今後の関わりへの意欲

本事業を通して、「今後もウマバをはじめとする四国の地域に関わりたいか？」という設問に対して、「とても思う」という回答が7割に上った。実際、本事業を通して地域と学生の協働によりウマバ集落で子ども食堂のInstagramの運用が開始され、それらをフォローし、今後も地域を見守っていくという緩やかな関わり体制が作られた。

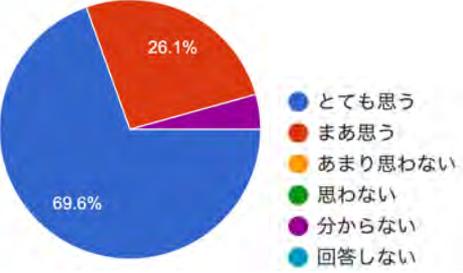


図 5-8 今後もウマバあるいは四国地域へ関わりたいか

また、OB 訪問やオンラインイベント、プロジェクト運営への興味、定期的な現地訪問など、具体的な関わり方の提案がなされた。また、次年度も同様のワークショップを開催する場合には参加を希望するか？という設問に対して、56%が参加を希望すると回答した。今回の参加者のうち初年度からの継続参加は3名であった。いずれも昨年度の経験が楽しく、また体験したい、仲間に会いたい、別の提案を試してみたいといった意欲が継続参加に繋がっていたようである。

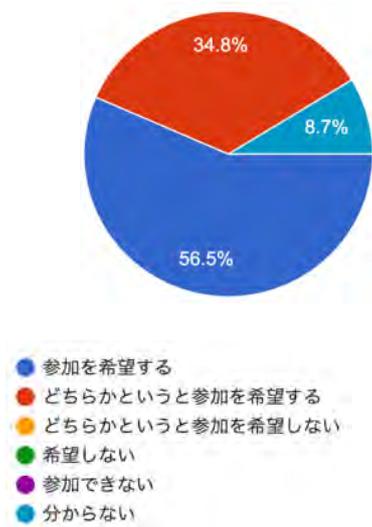


図 5-9 ワークショップの次回参加希望

### (7) 今後の要望や感想

アンケート最後に今後の運営に対する要望や感想を聞いた。多くの学生がグループメンバーや運営スタッフとの関わりを通して貴重な経験ができたことへの感謝の気持ちを表してくれていることは主催者として何よりも嬉しいことであった。次回の開催に向けて、グループ外のメンバーとの交流や、スムーズに交流を図るための工夫点など具体的なアイデアを得ることもできた。下記に回答全文を示す。

地域の方々だけでなく、全国の様々な建築学生たちと関われる大変貴重な機会を設けていただきありがとうございます。また、委員会の方々をはじめとし、3日間、様々な面でサポートしていただき、ありがとうございました。

班メンバーのプレゼンが上手すぎて感動しました。
BBQがあつたり、提案の幅が広がつたりと、あまり建築色が強くないのが良い点と感じた。
とても楽しかったです！ご飯の時間などで他班の学生とも交流出来て、実りのある時間になりました。欲を言えば、他の先生方や住民の方々、他の学生と話す時間がもっとあればよかったなーと思います。半分ほどの学生としか交流出来ていないのが少し寂しいです！また、全体のグループラインなどがあれば、これからもウマバの様子を気にすることが出来るなあと感じました。オープンチャットなどでも良いかもしれません！
初めてフィールドワーク合宿に参加して、地域の人と実際に関わって、考えを形にするっていうのを3日間で作るのはなかなかハードだったけど、来たことない地域の人のあたたかさを知れたし、他の大学生や院生と試行錯誤しながらひとつの物を作るという経験ができたので参加してよかった。沢山学ぶことがあって、濃すぎる3日間になった。
フィールドワーク全体を通して、地域の方の距離の近さがとても印象的でした。現地を歩き、話を聞き、実際の生活を感じながら学ぶことで、普段は得られないリアルな気づきがありました。近隣の方との繋がりの深さや、住民の方の心の豊かさを身にしみて感じ、優しさ、温かさで胸がいっぱいになりました。とても刺激的で温かく、貴重な体験でした。これからは建築を学ぶ身として、このようなウマバをはじめとする地方の方々の暮らしを壊してはいけないと改めて感じたとともに、地域に根づく風景や人々の知恵を大切にしながら、その魅力を引き出す建築を考えていこうと思いました。同じ建築を学ぶ学生方との交流もでき、私にとってすごく貴重な機会となりました。熊本から少し遠いので迷っていましたが、参加することができて本当に良かったです！ありがとうございました。
非常に安価で学びのある会でした！
全体的に時間に縛られず、自分たちの作品づくりに集中できたのがとても良かった。フィールドワーク期間にお祭りがあれば、多数の地域住民の声を聞けたり、未知のウマバの魅力があるのではないかと思った。
もう少しフィールドを探検できる時間がほしい。
時間がずっと焦ってしまう点、ご飯当番が作業のいいところに被ってしまう点、チームメンバー以外とあまり会話する時間がとりにくい点、名札をニックネームとかで書いてもらったら、名前を呼びやすく覚えやすいように思いました。全体を通しては、学生主体ながらもフォロー体制がしっかりしており安心して作業を進められました。アイデアに寄り添いできる限りのサポートをして頂いているように感じました。前回の活動から2回目にして最大限の改善されている運営体制や今回の活動中での改善もスピーディーだったのを覚えています。
三日間とても楽しく参加できました。全国からいろいろな大学からの学生がいて、その交流だけでも面白かったです。最終的な提案自体は、厳しい評価となってしまったけど、それに向けた考え方は大変ではあったけど、みんなで意見を交わしながらやりきることができたのは良かったです。町づくりについてはあまり参加してこなかったもので、そのリアルな難しさをどっしりと体感できました。スケジュールはかなりしんどかったのも、もう少しゆとりがあつたり、みんなで一つ一つのものを物として作り上げるプログラムもあるといいなと思いました。自分の中の興味や関心ごとが、今回の合宿でよりくっきりしたと感じました。ソフトをつくることより、ハードを考えることの方がワクワクできることを改めて実感できました。ただ、建築をつくるのが好きだから作るというのが、本当にその場所に合っているかどうかは別の話で、その判断はドライに取り組みたいと思います。短い時間だったけど、いろいろ

<p>ろな交流があって貴重な時間でした。ありがとうございました</p>
<p>強い要望を申し上げるとしたら、網戸と、蚊取り線香が欲しかったです。また、四国内の異なる特性の集落や、季節にも興味があります。とても貴重な経験ができました。ありがとうございました。様々な地域から、学生が来ており、柔軟な、考えや手法が混ざっていて面白かったです。参加学生はもとより、今回のフィールドワークに関わってくださった全ての方に会えることができたことがありがたいです。ありがとうございました。</p>
<p>フィールドワークを初めとしたプログラムの時間が全体的にかなりタイトだったので、もう少し余裕があるものだと良いと感じました。普段関わる事のない地域でたくさんの人と関わるとても楽しくなる活動でした。ありがとうございます。ぜひ次回も参加したいと思います。送迎があるだけでなく、お菓子や夜食、BBQなどとても予算8000円で実現したとは思えないほど手厚いサポートをいただきとても充実した3日間になりました。四国外の学生にも配慮した日程で参加しやすかったです。ありがとうございました。</p>
<p>途中で帰ることになってしまいました。その際に優しく声をかけてくださったり、駅まで送ってくださったりと、本当にありがとうございました。あの時のご配慮に心から感謝しています。短い時間でしたが、先生方や地域の方々の温かさに触れ、とても印象に残る時間でした。また機会があればぜひ参加したいです。</p>
<p>要望としては、メンバー外のメンバーともう少しかわりたかった。BBQなどの食事タイムではチーム外の人との交流ができるような工夫が欲しいと感じた。感想としては、第一に、建築を専攻している学生のアイデア力やビジュアル化の力に驚かされるが多かった。高校生でも専門的な知識があり、参加者全体のレベルが非常に高いと感じた。また、私が建築の魅力に気付いたと同時に、チームメンバーにも土木の魅力に気付いている人もいて、とてもうれしく感じた。将来は、土木の知見を持ちつつ、建築の観点も持ち合わせた人材になり、まちづくりに携わりたいと思うきっかけとなった合宿だった。</p>

## 6. おわりに

昨年度に引き続き、ウマバ集落での二回目の建築学生フィールドワーク合宿開催となった。

継続することで、地域との協働が可能となり、様々な面でプログラムを深化・発展させた形での事業を開催することができた。また、全国から参加者を得ることができ、学生にとってもよりよい交流と学びの機会を提供することができた。

男女共同参画推進の視点からは、高橋氏の講演を通して、多様な働き方・暮らし方を実践する姿を学生たちに伝えることができた。また、事後アンケートでは、直接的なジェンダー言及は限定的であった一方、学年・専攻・地域の異なる参加者が協働し、互いの意見を尊重して成果物を創出したという記述が多数見られた。

これは、対等な参画機会・協働の場づくり（ジェンダー主流化の基盤）を体験的に提供できたことを示している。さらに、今後も四国地域に関わりたかどうかについて、「とても思う」

「まあ思う」と回答した割合が高く、住民との交流や地域の温かさ、実践的な活動を通じて関与意向が高まったことが確認でき、四国で働きたいと思う意識の醸成にも繋がったのではないかと考える。集落でのフィールドワークや提案プロセスを通して、性別や年齢、地域のハードルを超えて生き生きと暮らす人々の姿を伝えることができたと考える。

最後に、本事業の実施に際してはウマバ地域、並びに一般社団法人四国まんなか創造推進協議会の方々の協力なしには実現できるものではありませんでした。ご協力くださった皆様はこの場を借りて感謝申し上げます。また、建築学会四国支部男女共同参画推進委員会のスタッフはじめ本事業への理解を下さっている事務局・役員の皆様にも謝意を申し上げます。